昭和文学全集

7

梶井基次郎

牧野信一

中島敦

嘉村礒多

内田百閒

中勘助

広津和郎

梶井基次郎

牧野信一

中島敦

嘉村礒多

内田百閒

小学館

昭和文学全集
第7巻

平成元年五月一日　初版第一刷発行

著者——梶井基次郎　牧野信一　中島敦　嘉村礒多
内田百閒　中勘助　広津和郎　瀧井孝作
網野菊　丸岡明　森茉莉

発行者——相賀徹夫
発行所——小学館
〒一〇一—〇〇一　東京都千代田区一ツ橋二丁目三番一号
振替　東京八—一七〇〇番
電話　編集・〇三—三二三〇　五二三六
業務・〇三—三二三〇—五三三三
販売・〇三—三二三〇—五七二九

印刷——凸版印刷株式会社
製本——凸版印刷株式会社
若林製本工場
用紙——三菱製紙株式会社
著者検印は省略いたしました

Printed in Japan ISBN 4-09-568007-5
©TAKESHI NAKAJIMA　MINO ITO
HIDE NAKA　MOMOKO HIROTSU　SHINKO KOMACHIYA
JUICHI AMINO　MIYAKO MARUOKA　JAKKU YAMADA　1989

＊造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

梶井基次郎 5

7 檸檬
11 城のある町にて
25 泥濘
30 路上
33 橡の花――或る私信――
41 過古
43 雪後
48 ある心の風景
54 Kの昇天――或はKの溺死
58 冬の日
67 蒼穹
69 筧の話
71 器楽的幻覚
73 冬の蠅
80 ある崖上の感情
88 桜の樹の下には
90 愛撫
93 闇の絵巻
96 交尾
100 のんきな患者

牧野信一 113

115 村のストア派
128 吊籠と月光と
138 ゼーロン
148 酒盗人
158 泉岳寺附近
166 心象風景
177 天狗洞食客記
191 夜見の巻「吾が昆虫採集記」の一節
199 鬼涙村
209 裸虫抄
218 淡雪

中島敦 229
231 木乃伊
234 山月記
238 文字禍
243 光と風と夢
298 名人伝
302 弟子
319 李陵

嘉村礒多 341
343 業苦
355 崖の下
367 父となる日
378 生別離
395 孤独
400 足相撲
404 曇り日
413 牡丹雪
421 不幸な夫婦
428 途上
445 神前結婚

内田百閒 455
457 旅順入城式 より
481 債鬼
488 梟林記
492 掻痒記
500 竹杖記
509 長春香
513 明暗交友録
517 棗の木
527 青炎抄
544 サラサーテの盤
552 無伴奏
561 特別阿房列車
575 日没閉門

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中勘助 579
581 菩提樹の蔭
601 鳥の物語 より 雁の話 鶴の話
618 母の死
624 妹の死

広津和郎 631
633 ひさとその女友達
659 あの時代——芥川と宇野——

瀧井孝作 693
695 結婚まで
710 慾呆け
717 山女魚
723 積雪
732 父祖の形見
741 伐り禿山
749 山の姿
759 野趣
770 俳人仲間 第三篇 初めての女

網野菊 809
811 母
824 金の棺
844 業
858 さくらの花
880 一期一会

丸岡明 891
893 生きものの記録
969 静かな影絵

森茉莉 995
997 恋人たちの森
1028 枯葉の寝床
1066 贅沢貧乏

1077 薔薇くい姫
1097 作家アルバム

解説

1105 梶井基次郎……野島秀勝
1109 牧野信一……千石英世
1113 中島敦……富士川義之
1117 嘉村礒多……秋山駿
1121 内田百閒……川村二郎
1125 中勘助……三好行雄
1129 広津和郎……勝又浩
1133 瀧井孝作……川村湊
1137 網野菊……進藤純孝
1141 丸岡明……池内輝雄
1145 森茉莉……矢川澄子

年譜

1149 梶井基次郎……鈴木貞美
1153 牧野信一……保昌正夫
1157 中島敦……田鍋幸信
1161 嘉村礒多……保昌正夫
1165 内田百閒……中村武志
1170 中勘助……紅野敏郎
1174 広津和郎……福田久賀男
1178 瀧井孝作……保昌正夫
1183 網野菊……保昌正夫
1187 丸岡明……池内輝雄
1191 森茉莉……小泉浩一郎

1196 底本について
1198 用字用語について

梶井基次郎

檸　檬

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終圧えつけていた。焦燥と云おうか、嫌悪と云おうか――酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した肺尖カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器を聴かせて貰いにわざわざ出かけて行っても、最初の二三小節で不意に立ち上ってしまいたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

何故だか其頃私は見すぼらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしても他所他所しい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転してあったりむさくるしい部屋が覗いていたりする裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまう、と云ったような趣きのある街で、土塀が崩れていたり家並が傾きかかっていたり――勢いのいいのは植物だけで、時とすると吃驚させるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか――そのような市へ今自分が来ているのだ――という錯覚を起そうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。其処で一月程何も思わず横になりたい。希わくは此処が何時の間にかその市になっているのだったら。――錯覚がようやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火という奴が好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵具で赤や紫や黄や青や、様ざまの縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心を唆った。

それからまた、びいどろと云う色硝子で鯛や花を打出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれを嘗めて見るのが私にとって何ともいえない享楽だったのだ。あのびいどろの味程幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなって落魄れた私に蘇ってくる故だろうか、全くあの味には幽かな爽かな何となく詩美と云ったような味覚

が漂って来る。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とは云えそんなものを見て少しでも心の動きかけた時の私自身を慰める為には贅沢ということが必要であった。二銭や三銭のもの――と云って贅沢なもの。美しいもの――と云って無気力な私の触角に寧ろ媚びて来るもの。――そう云ったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだ蝕まれていなかった以前私の好きであった所は、例えば丸善であった。赤や黄のオードコロンやオードキニン。洒落た切子細工や典雅なロココ趣味の浮模様を持った琥珀色や翡翠色の香水壜。煙管、小刀、石鹸、煙草。私はそんなものを見るのに小一時間も費すことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買う位の贅沢をするのだった。然し此処ももう其頃の私にとっては重くるしい場所に過ぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝――其頃私は甲の友達から乙の友達へという風に友達の下宿を転々として暮していたのだが――友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気のなかにぽつねんと一人取残された。私はまた其処から彷徨い出なければならなかった。何かが私を追いたてる。そして街から街へ、先に云ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立留ったり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、とうとう私は二条の方へ寺町を下り、其処の果物屋で足を留めた。此処でちょっと其の果物屋を紹介したいのだが、其の果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。其処は決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物は可成勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調の流れが、見る人を石に化したというゴルゴンの鬼面――的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなヴォリウムに凝り固まったという風に果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆく程堆高く積まれている。――実際あそこの人参葉の美しさなどは素晴しかった。それから水に漬けてある豆だとか慈姑だとか。

また其処の家の美しいのは夜だった。寺町通は一体に賑かな通りで――と云って感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが――飾窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうした訳かその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通に接している街角になっているので、暗いのは当然であったが、その隣家が寺町通にある家にも拘らず暗かったのが瞭然しない。然し其の家が暗くなかったら、あんなにも私を誘惑するには至らなかったと思う。もう一つは其の家の打ち出した廂なのだが、その廂が眼深に冠った帽子の廂のように――これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げているぞ」と思わせる程なので、廂の上はこれも真暗なのだ。そう周囲が真暗なため、店頭に点けられた幾つもの電灯が驟雨のように浴せかける絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、肆にも美しい眺めが照し出されているのだ。裸の電灯が細長い螺旋棒をきりきり眼の中へ刺し込んで来る往来に立って、また近所にある鎰屋の二階の硝子窓をすかして眺めた此の果物店の眺め程、その時どきの私を興がらせたものは寺町の中でも稀だった。

その日私は何時になくその店で買物をした。というのはその店には珍らしい檸檬が出ていたのだ。檸檬など極くありふれている。が其の店というのも見すぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋に過ぎなかったので、それまであまり見かけたことはなかった。一体私はあの檸檬が好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た紡錘形の恰好も。――結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私は何処へどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を圧えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たと見えて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなに執拗かった憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる――或いは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心という奴は何という不可思議な奴だろう。

その檸檬の冷たさはたとえようもなくよかった。その頃私は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかす為に手の握り合いなどをして見るのだが、私の掌が誰のよりも熱かった。その熱い故だったのだろう、握っている掌から身内に浸み透ってゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持って行っては嗅いで見た。それの産地だというカリフォルニヤが想像に上って来る。漢文で習った「売柑者之言」の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が断れぎれに浮んで来る。そしてふかぶかと胸一杯に匂やかな空気を吸込めば、ついぞ胸一杯に呼吸したことのなかった私の身体や顔には温い血のほとぼりが昇って来て何だか身内に元気が目覚めて来たのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと云い度くなった程私にしっくりしたなんて私は不思議に思える――それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな昂奮に弾んで、一種誇りかな気持さえ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思い浮べては歩いていた。汚れた手拭の上へ載せて見たりマントの上へあてがって見たりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、――つまりは此の重さなんだな。――

その重さこそ常づね私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さは総ての善いものの総ての美しいものを重量に換算して来た重さであるとか、思いあがった諧謔心からそんな馬鹿げたことを考えて見たり――何がさて私は幸福だったのだ。

何処をどう歩いたのだろう、私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善が其の時の私には易やすと入れるように思えた。

「今日は一つ入って見てやろう」そして私はずかずか入って行った。

然しどうしたことだろう、私の心を充していた幸福な感情は段々逃げて行った。香水の壜にも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が立て罩めて来る、私は歩き廻った疲労が出て来たのだと思った。私は画本の棚の前へ行って見た。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力が要るな！　と思った。然し私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、克明にはぐってゆく気持は更に湧いて来ない。然も呪われたことにはまた次の一冊を引き出して来る。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやって見なくては気が済まないのだ。それ以上は堪らなくなって其処へ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえ出来ない。私は幾度もそれを繰返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだったアングルの橙色の重い本まで尚一層の堪え難さのために置いてしまった。――何という呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまって、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼を晒し終って後、さてあまりに尋常な周囲を見廻すときのあの変にそぐわない気持を、私は以前には好んで味っていたものであった。……

「あ、そうだそうだ」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに

積みあげて、一度この檸檬で試して見たら。
「そうだ」
私にまた先程の軽やかな昂奮が帰って来た。私は手当り次第に積みあげ、また慌しく潰し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取去ったりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。
やっとそれは出来上った。そして軽く跳りあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。
見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。
不意に第二のアイディアが起った。その奇妙なたくらみは寧ろ私をぎょっとさせた。
――それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。――
私は変にくすぐったい気持がした。「出て行こうかなあ。そうだ出て行こう」そして私はすたすた出て行った。
変にくすぐったい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛て来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう。
私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みじんだろう」
そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている京極を下って行った。

城のある町にて

ある午後

「高いとこの眺めは、アアッ（と咳をして）また格段でごわすな」

片手に洋傘、片手に扇子と日本手拭を持っている。頭が奇麗に禿げていて、カンカン帽子を冠っているのが、まるで栓をはめたように見える。――そんな老人が朗らかにそう云い捨てたまま峻の脇を歩いて行った。云っておいて此方を振り向くでもなく、眼はやはり遠い眺望へ向けたままで、さもやれやれと云った風に石垣のはなのベンチへ腰をかけた。

――

町を外れてまだ二里程の間は平坦な緑。I湾の濃い藍がそれの彼方に拡っている。裾のぼやけた、そして全体もあまりかっきりしない入道雲が水平線の上に静かに蟠っている。

――

「ああ、そうですなあ」少し間誤つきながらそう答えた時の自分の声の後味がまだ喉や耳のあたりに残っているような気がされて、その時の自分と今の自分とが変にそぐわなかった。なんの拘りもしらないようなその老人に対する好意が頬に刻まれたまま、峻はまた先程の静かな展望のなかへ吸い込まれて行った。――風がすこし吹いて、午後であった。

一つには、可愛い盛りで死なせた妹のことを落ちついて考えて見たいという若者めいた感慨から、峻はまだ五七日を出ない頃の家を出て此の地の姉の家へやって来た。

ぼんやりしていて、それが他所の子の泣声だと気がつくまで、死んだ妹の声の気持がしていた。

「誰だ。暑いのに泣かせたりなんぞして」

そんなことまで思っている。

彼女がこと切れた時よりも、火葬場での時よりも、変った土地へ来てするこんな経験の方に「失った」という思いは強く刻まれた。

「たくさんの虫が、一匹の死にかけている虫の周囲に集って、悲しんだり泣いたりしている」と友人に書いたような、彼女の死の前後の苦しい経験がやっと薄い面紗のあちらに感ぜられるようになったのも此の土地へ来てからであった。そしてその思いにも落ちつき、新らしい周囲にも心が馴染んで来るに随って、峻には珍らしく静かな心持がやって来るようになった。いつも都会に住み慣れ、殊に最近は心の休む隙もなかった後で、彼はなおさらこの静けさの中で恭うやしくなった。道を歩くのにも出来るだけ疲れないように心掛ける。棘一つ立てないようにしよう。指一本詰めないようにしよう。ほんの些細なことがその日の幸福を左右する。――迷信に近い程そんなことが思われた。そして旱の多かった夏にも雨が一度来、二度来、それがあがる度毎に稍々秋めいたものが肌に触れるように気候もなって来た。

そうした心の静けさとかすかな秋の先駆は、彼を部屋の中の書物や妄想にひきとめて

はおかなかった。草や虫や雲や風景を眼の前へ据えて、秘かに抑えて来た心を燃えさせる、――ただそのことだけが仕甲斐のあることのように峻には思えた。

「家の近所にお城跡がありまして峻の散歩には丁度良いと思います」姉が彼の母の許へ寄来した手紙にこんなことが書いてあった。着いた翌日の夜。義兄と姉とその娘と四人で初めて此の城跡へ登った。旱の為うんかがたくさん田に湧いたのを除虫灯で殺している。それがもうあと二三日だからというので、それを見にあがったのだった。平野は見渡す限り除虫灯の海だった。遠くになると星のように瞬いている。山の峡間がぼうと照されて、そこから大河のように流れ出ている所もあった。彼はその異常な光景に昂奮して涙ぐんだ。風のない夜で涼みかたがた見物に来る町の人びとで城跡は賑わっていた。暗のなかから白粉を厚く塗った町の娘達がはしゃいだ眼を光らせた。

今、空は悲しいまで晴れていた。そしてその下に町は甍を並べていた。

白堊の小学校。土蔵作りの銀行。寺の屋根。そして其処此処、西洋菓子の間に詰めてあるカンナ屑めいて、緑色の植物が家々の間から萌え出ている。或る家の裏には芭蕉の葉が垂れている。糸杉の巻きあがった葉も見える。重ね綿のような恰好に刈られた松も見える。みな黝んだ下葉と新らしい若葉で、いい風な緑色の容積を造っている。

遠くに赤いポストが見える。

乳母車なんとかと白くペンキで書いた屋根が見える。

日をうけて赤い切地を張った張物板が、小さく屋根瓦の間に見える。――

夜になると火の点いた町の大通りを、自転車でやって来た村の青年達が、大勢連れで遊廓の方へ乗ってゆく。店の若い衆なども浴衣がけで、昼見る時とはまるで異った風に身体をくねらせながら、白粉を塗った女をからかってゆく。――そうした町も今は屋根瓦の間へ挟まれてしまって、そのあたりに幟をたくさん立てて芝居小屋がそれと察しられるばかりである。

西日を除けて、一階も二階も三階も、西の窓すっかり日覆をした旅館が稍々近くに見えた。何処からか材木を叩く音が――もともと高くもない音らしかったが、町の空へ「カーン、カーン」と反響した。

次つぎ止まるひまなしにつくつく法師が鳴いた。「文法の語尾の変化をやっているようだな」ふとそんなに思って見て、聞いていると不思議に興が乗って来た。「チュクチュクチュク」と始めて「オーシ、チュクチュク」を繰返えす、そのうちにそれが「チュクチュク、オーシ」になったり「オーシ、チュクチュク」にもどったりして、しまいに「スットコチーヨ」「スットコチーヨ」になって「ジー」と鳴きやんでしまう。中途に横から「チュクチュク」とはじめるのが出て来る。するとまた一つのは「スットコチーヨ」を終って「ジー」に移りかけている。三重四重、五重にも六重にも重なって鳴いている。

峻は此の間、やはりこの城跡のなかにある社の桜の木で法師蟬が鳴くのを、一尺程の間近で見た。華車な骨に石鹸玉のような薄い羽根を張った、身体の小さい昆虫に、よくあんな高い音が出せるものだと、驚きながら見ていた。その高い音と関係があると云えば、ただその腹から尻尾へかけての伸縮であった。柔毛の密生している、節を持った、その部分は、まるでエンジンの或る部分のような正確さで動いていた。――その時の恰好が思い出せた。腹から尻尾へかけてのブリッとした膨らみ。隅ずみまで力ではち切ったような伸び縮み。――そしてふと蟬一匹の生物が無上に勿体ないものだという気持に打たれた。

時どき、先程の老人のようにやって来ては涼をいれ、景色を眺めてはまた立ってゆく人

があった。

峻が此処へ来る時によく見る、亭の中で昼寝をしたり海を眺めたりする人がまた来ていて、今日は子守娘と親しそうに話をしている。

蟬取竿を持った子供があちこちする。虫籠を持たされた児は、時どき立留っては籠の中を見、また竿の方を見ては小走りに随いてゆく。物を云わないでいて変に芝居のような面白さが感じられる。

またあちらでは女の子達が米つきばったを捕えては、「ねぎさん米つけ、何とか何とか」と云いながら米をつかせている。ねぎさんというのは此の土地の言葉で神主のことを云うのである。峻は善良な長い顔の先に短い二本の触角を持った、そう思えばいかにも神主めいたばったが、女の子に後脚を持たれて身動きのならないままに米をつくその恰好が呑気なものに思い浮んだ。

女の子が追いかける草のなかを、ばったは二本の脚を伸し、日の光を羽根一ぱいに負いながら、何匹も飛び出した。

時どき烟を吐く煙突があって、田野はその辺りから展けていた。レムブラントの素描めいた風景が散ばっている。

黝い木立。百姓家。街道。そして青田のなかに褪赭の煉瓦の煙突。

小さい軽便が海の方からやって来る。

海からあがって来た風は軽便の煙を陸の方へ、その走る方へ吹きなびける。

見ていると煙のようではなくて、煙の形を逆に固定したまま玩具の汽車が走っているようである。

ササササと日が翳る。風景の顔色が見る見る変ってゆく。

遠く海岸に沿って斜に入り込んだ入江が見えた。――峻は此の城跡へ登る度、幾度となくその入江を見るのが癖になっていた。

海岸にしては大きい立木が所どころ繁っている。その蔭にちょっぴり人家の屋根が覗いている。そして入江には舟が舫っている気持。

それはただそれだけの眺めであった。何処を取り立てて特別心を惹くようなところはなかった。それでいて変に心が惹かれた。

なにかある。本当になにかがそこにある。と云ってその気持を口に出せば、もう空ぞらしいものになってしまう。

例えばそれを故のない淡い憧憬と云った風の気持、と名づけて見ようか。誰かが「そうじゃないか」と尋ねて呉れたとすれば彼はその名づけ方に賛成したかも知れない。然し自分では「まだなにか」という気持がする。

人種の異ったような人びとが住んでいて、此の世と離れた生活を営んでいる。――そんなような所にも思える。とはいえそれはあまりお伽話めかした、ぴったりしないところがある。

なにか外国の画で、彼処に似た所が描いてあったのが思い出せない為ではないかとも思って見る。それにはコンスティブルの画を一枚思い出している。やはりそれでもない。

では一体何だろうか。このパノラマ風の眺めは何に限らず一種の美しさを添えるものである。然し入江の眺めはそれに過ぎていた。そこに限って気韻が生動している。そんな風に思えた。――

空が秋らしく青空に澄む日には、海はその青より稍々温い深青に映った。白い雲がある時は海も白く光って見えた。今日は先程の入道雲が水平線の上へ拡ってザボンの内皮の色がして、海も入江の真近までその色に映っていた。今日も入江はいつものように謎をかくして静まっていた。

見ていると、獣のようにこの城のはなから悲しい唸声を出して見たいような気になるのも同じであった。息苦しい程妙なものに思えた。

夢で不思議な所へ行っていて、此処は来た覚えがあると思っている。――丁度それに似た気持で、えたいの知れない想い出が湧いて

来る。
「ああかかる日のかかるひととき」
「ああかかる日のかかるひととき」
何時用意したとも知れないそんな言葉が、ひらひらとひらめいた。――
「ハリケンハッチのオートバイ」
「ハリケンハッチのオートバイ」
先程の女の子らしい声が峻の足の下で次つぎに高く響いた。丸の内の街道を通ってゆくらしい自動自転車の爆音がきこえていた。
この町のある医者がそれに乗って帰って来る時刻であった。その爆音を聞くと峻の家の近所にいる女の子は我勝ちに「ハリケンハッチのオートバイ」と叫ぶ。「オートバ」と云っている児もある。
三階の旅館は日覆をいつの間にか外した。遠い物干台の赤い張物板ももう見つからなくなった。
町の屋根からは煙。遠い山からは蜩。

手品と花火

これはまた別の日。
夕飯と風呂を済ませて峻は城へ登った。
薄暮の空に、時どき、数里離れた市で花火をあげるのが見えた。気がつくと綿で包んだような音がかすかにしている。それが遠いので間の抜けた時に鳴った。いいものを見る、と彼は思っていた。
ところへ十七程を頭に三人連れの男の児が来た。これも食後の涼みらしかった。峻に気を兼ねてか静かに話をしている。
口で教えるのにも気がひけたので、彼はわざと花火のあがる方を熱心なふりをして見ていた。
末遠いパノラマのなかで、花火は星水母ほどのさやけさに光っては消えた。海は暮れかけていたが、その方はまだ明るみが残っていた。
暫くすると少年達もそれに気がついた。彼は心の中で喜んだ。
「四十九」
「ああ。四十九」
そんなことを云いあいながら、一度あがって次あがるまでの時間を数えている。彼はそれらの会話をきくともなしに聞いていた。
「××ちゃん。花は」
「フロラ」一番年のいったのがそんなに答えている。――
城でのそれを憶い出しながら、彼は家へ帰って来た。家の近くまで来ると、隣家の人が峻の顔を見た。そして慌てたように
「帰っておいでなしたぞな」と家へ云い入れた。
奇術が何とか座にかかっているのを見にゆこうかと云っていたのを、峻がぽっと出てしまったので騒いでいたのである。
「あ。どうも」と云うと、義兄は笑いながら
「はっきり云うとかんのがいかんのやさ」と姉に背負わせた。姉も笑いながら衣服を出しかけた。彼が城へ行っている間に姉も信子（義兄の妹）もこってり化粧をしていた。
姉が義兄に
「あんた、扇子は？」
「衣嚢にあるけど……」
「そうやな。あれも汚れてますで……」
姉が合点合点などしてゆっくり捜しかけるのを、じゅうじゅうと音をさせて煙草を呑んでいた兄は
「扇子なんかどうでもええわな。早う仕度しゃんし」と云って煙管の詰ったのを気にしていた。
奥の間で信子の仕度を手伝ってやっていた義母が
「さあ、こんなは奈何やな」と云って団扇を二三本寄せて持って来た。砂糖屋などが配って行った団扇である。
姉が種々と衣服を着こなしているのを見ながら、彼は信子がどんな心持で、またどんな風で着附けをしているだろうなど、奥の間の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com